

食堂かたつむり

小川 糸

主人公の倫子(りんこ)がバイト先のトルコ料理店より帰ってくると、部屋の中はもぬけの殻。同棲していたインド人の恋人も居らず、合鍵のみがぼつんと部屋の中に残されている。そして彼女の声は透明になってしまった。そんな場面から物語は始まります。倫子は冷戦状態の続く「おかん」に助けを求めるのではなく、母親の畑に埋めているへそくりをこっそり盗んで都会で再びやり直すために、夜行バスに乗って自分の故郷に帰りますが、計画はあっさり飼いの豚のエルメスの妨害に遭いおかんにお金をかりて食堂「かたつむり」を始め、そのうちに「彼女の料理を食べた人は奇跡が起きる」という噂が出るほど口コミで広がってゆきました。

彼女がすることは、お客様が気持ちよく美味しく食べられるようにと考えて料理をするだけでした。物語は進んでゆきおかんがガンで余命数ヶ月という告白を聞きますが、彼女の声はまだ戻ってきません。おかんの死後みつけた自分宛の手紙を読んでも声はまだ戻ってこず。料理をする気力を失った彼女はある日、野鳩がガラスに追突して死んでしまう場面に会います。この地方の野鳩は美味しいという言葉を思い出した彼女はそれをローストして食べたときに声に戻るのです。

疲れてしんどいときこそ美味しいものが食べたくなるのに悲しいことに食べたいが思いつかない。そんなとき食べる代わりにこの本を読んで食べた気分になっていました。

F・N



掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞